

学術提言

哲学系国際誌への論文投稿に係る 投稿先選定のための手引き

——哲学分野における主要な国際誌データベース情報、ハゲタカジャーナル情報、および国際誌と本邦学会誌との差異に関する試論——

田村 歩

ORCID <https://orcid.org/0000-0002-1249-324X>

筑波大学

〒 305-8577 つくば市天王台 1 丁目 1-1

2019 年 10 月 25 日原稿受付

Citation: 田村 歩 (2020). 哲学系国際誌への論文投稿に係る投稿先選定のための手引き——哲学分野における主要な国際誌データベース情報、ハゲタカジャーナル情報、および国際誌と本邦学会誌との差異に関する試論——. *Journal of Science and Philosophy*, 3 (1), 25–48.

1 はじめに

周知のように、哲学を含む人文科学系の研究領域は、発展目覚ましい自然科学系への追従というかたちで変革を求められてきた。そのうちの一つに、外国語での論文執筆はもちろんのこと、国際誌への論文投稿が強く求められるようになったということが挙げられる。これまで、外国語で論文を執筆し国内の哲学系学会誌・紀要に投稿するということが珍しくなかったが、今後は、留学経験の有無などにかかわらず海外の論文誌に投稿していくことが一般化していくものと思われる。しかしながら、現状、本邦において哲学系国際誌に論文を投稿するための情報が充

分に整備されているとはいえ、論者自身、大学院在籍中に初めて国際誌へ論文を投稿した際には相当の時間を情報収集に費やさざるをえなかった。そこで本稿では、国際誌への投稿に際して論者が収集してきた情報を、哲学分野の大学院生や若手研究者が今後投稿先の国際誌を選定するときに少しでも役立つようまとめておきたい。具体的には、第一に、可能な限り多くの選択肢を得るのに有益となるジャーナルデータベースをいくつか紹介する。検索エンジンにてキーワード検索することで該当する雑誌を一つ一つ調べていく、あるいは、自身の研究テーマに関連する研究論文の掲載元を辿っていくという方法ももちろん可能だが、現在すでに列挙不可能なほどに膨大な数の哲学系国際誌が存在するため、効率よく情報を収集する必要がある。本稿が紹介する各データベースはその一助になるだろう。第二に、昨今各大学が注意喚起しているいわゆるハゲタカジャーナルのうち、哲学分野においてその懸念のある雑誌を個別的介绍する。一般的にハゲタカジャーナルの誌名は、著名な雑誌のそれに似せて設定されているばかりか、完全に同一の誌名であることさえあるし、ホームページも一見すると真正な国際誌のそれと遜色のない作りになっており、判別には細心の注意が必要である。そのため、ハゲタカジャーナルであることが懸念される雑誌を個別的介绍するだけでなく、それらの雑誌に共通する特徴を抽出し、信用のおける国際誌であるか否かを判別するための目安を提示したい。

最後に、国際誌と比較した場合に浮かび上がってくる本邦の哲学系学術雑誌における問題点を指摘しておきたい。なぜなら、本邦の哲学系学術雑誌が問題を抱えているとするならば、それは、本邦で研究活動を行う研究者、とりわけ、常勤研究職を巡るさらなる競争の激化および必要とされる研究業績の増加に晒される若手研究者に直結する問題であるからだ。

2 主要ジャーナルデータベース

現在すでに列挙不可能なほどに膨大な数の哲学系国際誌が存在する。そこで、投稿先の選定に役立つデータベースをいくつか紹介したい。

〈PhilPapers〉

URL: <https://philpapers.org/journals>

周知のとおり、哲学系で世界最大規模の文献データベースである。先行研究の調査にはもちろんだが、ジャーナルリストには現在 1360 もの雑誌が登録されており、投稿すべき雑誌を選定する際にも極めて有益である。ただし、ハゲタカ出版社——これについては次節で言及する——が刊行する雑誌も登録されているため、注意が必要である。

加えて、当データベースはあくまで研究成果物そのものに焦点を当てているため、現在新規に論文を公募していない雑誌も掲載されており、また成果物の媒体についての詳細はほとんど記されていない（誌名、巻号数、発行所、発行年程度である）。したがって、投稿規定などの詳細を確認するためには逐一誌名を検索し直す必要がある（もっとも、これから一本目の英語論文を発表するべく無数に存在する国際誌から適切な媒体を探し当てなければならない若手研究者にとって、これは避けて通れない作業であろう）。

〈Philosophical Documentation Center〉

URL: <https://www.pdcnet.org/pdc/bvdb.nsf/journalindex>

哲学史から生命倫理や経営倫理に至るまでの幅広い分野に関する 200 以上の国際誌がリストアップされている。当データベースは、雑誌ごとに編集委員情報・投稿方法・投稿規定といった詳細を含んでおり、使い勝手の点で優れている。ただし、雑誌の登録数は先述の〈PhilPapers〉に比べて圧倒的に少なく、また、学協会のプロシーディングなど現在論文

を公募していないものもやはり含まれている。

〈Philosophy Journals〉

URL: http://users.ox.ac.uk/~worc0337/phil_journals.html

現トロント大学教授の Peter King が作成した哲学に関するウェブサイト*のうち、学術雑誌に関するサイト。紙面雑誌／電子雑誌の区別のもと、多くの雑誌がリストアップされている。前者については、「哲学史」や「言語哲学」、「学生向け」といった18の小区分が設けられ、フランス語やドイツ語など各西欧語での投稿を受け付けている雑誌も掲載されている。ただし、現在更新されておらず、すでに廃刊となっている雑誌も含まれている。

* http://users.ox.ac.uk/~worc0337/phil_index.html

〈Institute of Philosophy, Russian Academy of Sciences〉

URL: <https://eng.iph.ras.ru/periodicals.htm>

ロシア科学アカデミー附属哲学研究所が刊行する機関誌が紹介されている。当研究所は分野ごとに複数の機関誌を刊行しており、具体的には以下のとおり（対象領域は誌名から容易に推察されるだろう）。

- *Philosophy Journal*
- *Epistemology and Philosophy of Science*
- *Philosophy of Science and Technology*
- *Logical Investigations*
- *Ethical Thought*
- *History of Philosophy*
- *Philosophical Anthropology*
- *Philosophy of Religion: Analytic Researches*

3 ハゲタカ出版社によって刊行されている懸念のある 哲学系ジャーナル

〈Institute of Philosophy, Slovak Academy of Sciences〉

URL: <http://www.klemens.sav.sk/fiusav/?q=en/content/journals>

スロバキア科学アカデミー附属哲学研究所が刊行する機関誌が紹介されている。哲学一般を対象とした *Filozofia: Journal for Philosophy* 誌、および分析哲学、科学哲学、そして論理学を対象とした *Organ F* 誌との二つがある。前者は年間 10 号、後者は年間 4 号刊行される。

3 ハゲタカ出版社によって刊行されている懸念 のある哲学系ジャーナル

周知のとおり、いわゆる「ハゲタカジャーナル [Predatory Journal]」とは、厳格な査読の実施を謳いながら、実際には査読を行わず、不当な論文掲載費¹の獲得を目論む雑誌である。もっとも、著者に掲載費を要求する学術雑誌は多くあり、現に、本邦の大半の哲学系学会誌は投稿資格として有償（一般的に、数千円）の会員資格を挙げているし、また英語圏の最も著名なオープンアクセスジャーナルの一つである *Philosophers' Imprint* 誌は、投稿数の劇的な増加に対応するために 20 ドルの投稿費を要求している。しかしハゲタカジャーナルの論文掲載費は、それらと比較して極めて高額であり、日本円にして数万円になる。そして、哲学分野における真正な国際誌の大半は現在のところ投稿料を要求していない——これについては、本邦哲学系論文誌との相違点として次節で論じる——にもかかわらずハゲタカジャーナルへの投稿が絶えない理由の一つは、各誌が強調している短期間での査読である。多くの国際誌は、2～3 か月、場合によっては半年以上もの査読期間を要するが、哲学系ハゲタカジャーナルは、数週間という人文科学系では極端に短い査読期間を確約しているのだ。多くの論文業績を求められる研究者にとって、短期間での査読は極めて魅力的に映る。

もちろん、必要に迫られているからといって、査読に時間を要し採択率も軒並み低い国際誌を避けてハゲタカジャーナルに投稿することは研究者倫理に反するが、しかし、不注意によってそれと気づかずに投稿してしまうという事態も〔とりわけ非欧米圏の若手研究者において〕懸念される。そこで、本稿執筆者が独自に行った調査の結果を踏まえ、哲学分野における、ハゲタカジャーナルであることが懸念される、あるいは投稿先として相応しくないと考えられる国際誌を紹介したい²（本稿以下では、ハゲタカジャーナルであることが懸念される、あるいは投稿先として相応しくないと考えられる国際誌を「ハゲタカ懸念ジャーナル」と記す）。

International Journal of Philosophy

URL:<http://www.journalnetwork.org/journals/international-journal-of-philosophy>

Journal Network 社（2014年創立）より刊行。同社が刊行する数多のハゲタカ懸念ジャーナルは、人文科学・社会科学・自然科学のあらゆる分野にわたり、「Philosophy & Religion」の区分だけでも計31の雑誌が存在する³。しかしそのほとんどが、2014年創刊であるにもかかわらず、「本誌は新刊です。まだ出版物はありません。」という記述がみられる⁴。

また当雑誌は全言語の原稿を受け付けているが、この点からして正当な査読が行われていないことが容易に推察される（仮に世界に存在する7000個以上もの言語すべてに編集部が対応可能であったとしても、そこからさらに当該言語の話者と当該研究領域の専門家とを兼ねる二名以上の査読者を用意することはほぼ不可能である）。また、2014年創刊であるにもかかわらず現在に至るまでISSN/EISSNについての記載が「未定」のままであったり、掲載費の単位が明記されていなかったりするなど、杜撰なサイト運営であることが判る。加えて、雑誌の編集者および査読者を外部から一般公募している。査読期間に関する記載はない。掲

3 ハゲタカ出版社によって刊行されている懸念のある 哲学系ジャーナル

載費は「145.00」（単位不明）。

International Journal of Philosophy

URL: [http://www.sciencepublishinggroup.com/journal/index?
journalid=204](http://www.sciencepublishinggroup.com/journal/index?journalid=204)

Science Publishing Group 社（2012年創業）より刊行。同社もやはり人文科学・社会科学・自然科学のあらゆる分野のハゲタカ懸念ジャーナルを刊行しているが、2019年9月現在、哲学系のものは本誌のみである。

一般的に、学術雑誌への投稿に際して、著者は投稿規定に従って原稿を執筆することが求められるも、最終的にそれを各雑誌に独自の仕方でも編集するのは専任の編集者である。しかし本誌の場合、著者は投稿の段階で、そのまま出版されるテンプレートを使って執筆する必要がある（採択から出版までに掛かる期間は2週間と明記されており、出版までに編集部による編集作業はほとんど行われていないと考えられる）。査読に要する期間は、人文系分野では異例のわずか2週間となっている。掲載費は570 USD。

International Journal of Philosophy and Theology

URL: <http://ijptnet.com/>

American Research Institute for Policy Development 社（2011年創業）より刊行。同社もやはり人文科学・社会科学・自然科学のあらゆる分野のハゲタカ懸念ジャーナルを刊行しているが、2019年9月現在、哲学系のものは、神学の分野を兼ねた本誌のみである。

本誌は、イギリスに本社を構える大手学術出版企業の Taylor & Francis Group 社（1852年創業）より刊行される *International Journal of Philosophy and Theology* 誌と完全に同名であり、哲学系ハゲタカ懸念ジャーナルのうちで最も悪質なものであるといえる。サウスカロライナ大学准教授の Justin Weinberg が運営するウェブサイト〈Daily Nous〉* における或る記事 ** は、本誌編集部からの採択通知書に氏名が記載されているエディ

哲学系国際誌への論文投稿に係る投稿先選定のための手引き

ターが実在の人物であるか不明であったこと、また、刊行元の American Research Institute 社が自社所在地としている地所をグーグルマップで検索した結果、その〔自称〕所在地が数件の民家のみの辺鄙な土地であったことを明らかにしている。査読に要する期間は最長で2週間となっており、やはり異例の短さである。掲載費は200USD。

* <http://dailynous.com/about/>

** <http://dailynous.com/2016/10/04/publishing-scam-mimics-legitimate-journal/>

Journal of Philosophy and Ethics

URL: <https://www.sryahwapublications.com/journal-of-philosophy-and-ethics/>

Sryahwa Publications 社（おそらく2013年創業）より刊行。人文科学・社会科学・自然科学を対象とするハゲタカ懸念ジャーナルを多数刊行している同社だが、とりわけ生物学系、人文社会系、医療系のものが多い。

本誌は2019年創刊の新しいハゲタカ懸念ジャーナルである。投稿規定は、「短報」や「症例報告」といった論文種別、字数制限その他に至るまで、同社が刊行するすべての雑誌と共通のものとなっている。査読期間に関する記載はない。掲載費は300USD (High Income Countries) / 100USD (Developing Countries)。

Journal of Research in Philosophy and History

URL: <http://www.scholink.org/ojs/index.php/jrph/index>

Scholink 社（2012年創業）より刊行。同社は人文社会系のハゲタカ懸念ジャーナルを多く刊行しているが、近年は自然科学系分野にも対象を拡げつつある。

同社刊行の哲学系ハゲタカ懸念ジャーナルは、2019年9月現在、本誌のみである。査読期間は2週間となっている。掲載費は300USD。

3 ハゲタカ出版社によって刊行されている懸念のある 哲学系ジャーナル

Open Journal of Philosophy

URL: <http://www.scirp.org/journal/ojpp/>

Scientific Research Publishing 社（2007年創業）より刊行。数多の自然科学分野のハゲタカ懸念ジャーナルを刊行しており、人文科学・社会科学分野のものもいくつか刊行している。

同社刊行の哲学系ハゲタカ懸念ジャーナルは、2019年9月現在、本誌のみである。本誌は、先述の *International Journal of Philosophy* 誌と同様に、投稿の段階で、そのまま出版されるテンプレートを使って執筆する必要がある。刊行された各論文には投稿日・採択日・刊行日が明記されているが、それらの論文は採択されてからおよそ3日で刊行されていることから、編集部による編集作業が行われているとは考えられない。査読期間は4週間以内となっている。掲載費は599USD。

Philosophy International Journal

URL: <https://medwinpublishers.com/PhIJ/index.php>

MedWin Publishers 社（おそらく2016年創業）より刊行。同社は自然科学、とりわけ社名から推察されるように医療系分野を対象とするハゲタカ懸念ジャーナルを多数刊行しているが、そのうち本誌は唯一の哲学分野を対象とするものである。

先述の *Journal of Philosophy and Ethics* 誌と同様、投稿規定は同社が刊行するすべての雑誌と共通のものとなっている。査読期間に関する記載はないが、各刊行論文に明記されている情報によれば、多くの場合、原稿受理日から出版日までおよそ1か月となっている。掲載費は1749USD (High Income) / 1249USD (Middle Income) / 649USD (Low Income)。

Philosophy Study

URL: <http://www.davidpublisher.org/index.php/Home/Journal/detail?journalid=44&jx=ps>

David Publishing Company 社（2001年創業）より刊行。自然科学系ハゲタカ懸念ジャーナルを多数刊行する同社による哲学系ハゲタカ懸念ジャーナルは本誌のみである。

本誌は、先述の *International Journal of Philosophy* 誌および *Open Journal of Philosophy* 誌と同様に、投稿の段階で、そのまま出版されるテンプレートを使って執筆する必要がある。査読期間に関する記載はない。掲載費は一頁につき 60USD となっているが、「最終的な料金は査読報告書に基づいて決められる」と付言されている。

* * *

現在、ハゲタカジャーナルの対象領域は自然科学系が圧倒的多数を占めているが、今後は哲学を含め人文科学系のものもさらに増えていくだろう。しかも、それに伴って手口の巧妙さも増していくものと考えられる。そこで最後に、本稿で紹介した哲学系ハゲタカ懸念ジャーナルの特徴を踏まえつつ、それらを判別するための目安となる指標⁵をまとめておきたい。もっとも、以下に示す指標はすでに指摘されているものである⁶が、それを実際に哲学分野のハゲタカ懸念ジャーナルに当て嵌めて検討してみよう。

第一に、対象領域の広さである。多くの哲学系ハゲタカ懸念ジャーナルは、より多くの投稿者を募るため、哲学史・分析哲学・論理学・政治哲学・法哲学・教育哲学・美学・東洋哲学・宗教哲学・キリスト教史・イスラム教史・生命倫理など、哲学に関連するあらゆる分野を対象としている。もちろん、著名な哲学系国際誌でも、多くの対象領域が列挙されていたり、投稿規定に「哲学に関するもの」と記載されていたりするが、上記のハゲタカ懸念ジャーナルの多くは、対象領域を過剰といっ

3 ハゲタカ出版社によって刊行されている懸念のある 哲学系ジャーナル

てよいほどに細分化しているのだ。真正な国際誌である *Journal of the American Philosophical Association* 誌 (JAPA) および *Philosophy Compass* 誌と、ハゲタカ懸念ジャーナルである *International Journal of Philosophy and Theology* 誌 (IJPT) および *Journal of Philosophy and Ethics* 誌 (JPE) とを比較してみよう。

哲学系国際誌への論文投稿に係る投稿先選定のための手引き

JAPA	Philosophy Compass	IJPT	JPE
<p>“[JAPA] provides a platform for original work in all areas of philosophy.”</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Aesthetics • Continental • Epistemology • Ethics • History of Philosophy • Logic & Language • Metaphysics • Mind & Cognitive Science • Naturalistic Philosophy • Philosophy of Science • Philosophy of Religion • Legal & Political Philosophy 	<ul style="list-style-type: none"> • History of Philosophy from Descartes to Kant • Knowledge and Reality • Ethics • Philosophy of Mind • Philosophy of Science and Social Science • Philosophy of Religion • The Philosophy of Logic and Language • Aesthetics • Medieval Philosophy: Aquinas • Medieval Philosophy: Duns Scotus and Ockham • The Philosophy of Kant • Post-Kantian Philosophy • Theory of Politics • Plato, Republic • Frege, Russell, and Wittgenstein • Formal Logic • Philosophy of Physics • Philosophy of Mathematics • Jurisprudence • The Rise of Modern Logic • Biblical Studies • Biblical Interpretation • Christian History • Islamic History and Culture • Theological Foundations • Christian Formation • Faith and spirituality in today • Theology of Everyday Life, Work & Vocation • Exegesis • Church Mission • Ethics • Kingdom of God • Contemporary Trinitarian Theology • Old Testament Theology • New Testament Theology • Communication Skills in Theology • Hinduism • Buddhism • Indigenous Religions 	<ul style="list-style-type: none"> • African philosophy • Anarchist ethics • Ancient philosophy • Animal ethics • Applied ethics • Applied philosophy • Bioethics • Buddhist philosophy • Business ethics • Consequentialism/Teleology • Contemporary philosophy • Contemporary virtue ethics • Cyrenaic hedonism • Deontology • Descriptive ethics • East Asian philosophy • Eastern philosophy • Epicureanism • Epistemology • Ethics of care • Evolutionary ethics • Hedonism • Indian philosophy • Indigenous American philosophy • Islamic philosophy • Logic, science and mathematics • Machine ethics • Medieval philosophy • Meta-ethics • Metaphysics • Middle Eastern philosophy • Military ethics • Modern philosophy • Moral psychology • Non-professional philosophy • Normative ethics • Political ethics • Popular culture • Postmodern ethics • Pragmatic ethics • Professional philosophy • Public sector ethics • Publication ethics • Relational ethics • Role of women in philosophy • Specific questions • State consequentialism • Stoicism • Utilitarianism • Value theory • Virtue ethics • Western philosophy
<p>【参考①】 <i>The Journal of Philosophy</i>: “Purpose: To publish philosophical articles of current interest [...]”</p> <p>【参考②】 日本哲学会『哲學』:「哲学に関するもの。」</p>	<p>【参考①】 <i>Filozofia: Journal for Philosophy</i>: Keywords: • Metaphysics • Epistemology • History of philosophy • Social and Political Philosophy • Philosophy of Mind • Ethics • Philosophy of Religion • Related Disciplines</p> <p>【参考②】 <i>The Philosophical Quarterly</i>: Keywords: • Philosophy • Philosophical • Quarterly • Journal • Research • Criticism • Analysis • Debate • Periodical • Review • Theory • History • Studies • Article • Epistemology • Aesthetics • Ethics • Moral • Knowledge • Perspectivism • Diachronic • Synchronic • Supervenience</p>	<p>※ 「Ethics」が二重に記載されている</p>	

3 ハゲタカ出版社によって刊行されている懸念のある 哲学系ジャーナル

以上の表から明らかなおり、哲学分野におけるハゲタカ懸念ジャーナルがホームページ上に列挙している対象領域の項目数は、真正の国際誌の二倍から五倍以上となっている（他に、*Journal of Research in Philosophy and History* 誌では 27 項目、*Philosophy International Journal* 誌では 50 項目、*Open Journal of Philosophy* 誌では 54 項目となっている）。もっとも、*Philosophy Study* 誌では 8 項目、Science Publishing Group 社刊行の *International Journal of Philosophy* 誌では 16 項目となっているように、この特徴に合致しないものもあるが、しかしそれ以外の哲学系ハゲタカ懸念ジャーナルはこの特徴を備えている⁷ ため、これを哲学系ハゲタカジャーナル判別のための一つの指標と考えることができる——少なくとも現時点では⁸——だろう。

第二に、査読期間の短さである。すでに紹介したもののうち査読期間を明記している哲学系ハゲタカ懸念ジャーナルでは査読期間が 2 週間から 4 週間となっているが、これは、哲学系国際誌および国内誌の多くが 3 か月前後⁹ かそれ以上¹⁰ の、あるいは、査読期間が比較的短い *Ergo: An Open Access Journal of Philosophy* 誌、*Journal of Modern Philosophy* 誌、*Res Philosophica* 誌であっても 8 週間前後の査読期間を要していることと比較すれば、異例の短さであるといえる。したがって、極端に短い査読期間を設定している雑誌への投稿には慎重を期す必要があるといえるだろう。もっとも、短期間の査読は学術雑誌の売りとなるので、今後真正な雑誌においても査読期間の短縮化の傾向が進む可能性はあるし、またハゲタカ懸念ジャーナルの側でも、一般的な哲学系国際誌とのギャップを解消すべく査読期間を修正してくる可能性もあるため、今後の動向に注意を向けなければならない。だが査読期間をたよりにしてハゲタカ懸念ジャーナルをほぼ確実に判別する指標として、当該雑誌の査読期間に関する記載が、その発行元出版社による他の全く異なる分野の諸雑誌の査読期間に関する記載と共通しているという点が挙げられる。たとえば American Research Institute for Policy Development 社は、すでに紹介した *International Journal of Philosophy and Theology* 誌の他にも、社会学か

ら自然科学に至る 80 冊以上のハゲタカ懸念ジャーナルを刊行しているが、当該雑誌を含むすべての雑誌において査読期間は「最長で 2 週間」となっている（2019 年現在）。このような、極端に短い査読期間に加えて、分野の相違を無視した査読システムを有する出版社による雑誌への投稿は控えた方が無難であろう。

4 哲学系国際ジャーナルと本邦の哲学系ジャーナルとの差異に関する試論

本節では、国際誌と比較した場合に浮かび上がってくる本邦の哲学系学術雑誌における問題点をいくつか指摘したい。すでに本稿第一節で言及したように、本邦の哲学系学術雑誌が抱える問題は、本邦で活動する〔若手〕研究者に多少なりとも影響をもたらすため、これを考慮に入れることは無益ではないと思われる。

4.1 投稿制度の差異

哲学系国際誌の多くは、年間複数回刊行され、投稿は随時可能である。編集部で電子投稿ないしメール投稿された原稿に一人の編集者が割り当てられ、その編集者が、担当の原稿を査読に回すか否かの決定を下す。いずれの場合でも、審査結果はその都度投稿者に通知される。それに対して、本邦の哲学系論文誌（以下「国内誌」と表記）では一般的に、投稿期限が定められており、また査読結果は全投稿者に対して同時に通知される¹¹。

この差異は研究者にとって重大である。研究者は一般的に自身の研究成果を影響力や規模の大きな学術雑誌で公表することを望むが、国際誌へ投稿する場合には、審査は個々の投稿ごとに行われるため結果の通知が最速であり、また不採択となっても、その時点で投稿可能な雑誌は他に多数あるのだから、ランクの高いジャーナルから投稿を行い、採択さ

4 哲学系国際ジャーナルと本邦の哲学系ジャーナルとの 差異に関する試論

れるまで順次ランクをくだるかたちで投稿を繰り返すというように、当該論文の公表に向けて効率的に行動することができる。これに対して、本邦の学会機関誌へ投稿する場合には、研究の遂行および論文の執筆と、その投稿のタイミングとの兼ね合いを考慮する必要が出てくる。たいていは年に一度しか公募せず、しかも決して数の多くはない全国区学会の機関誌への応募に都合の良い時期に研究成果が出るとは限らないし、だからといって、たとえば当人の望む媒体の応募期間の半年前に良好な研究成果が得られた場合、それを半年もの間寝かせておくというのは、当人のキャリアにとっても学界にとっても極めて不合理である。しかも、当該原稿が不採択となった場合、その時点で公募している他の媒体がなければ、さらに時間が浪費されることになるのだ。

もっとも、雑誌の刊行の回数は財政状況に左右されるため、この点の改善は容易ではない。しかし、投稿の機会については再考の余地があるのではないか。たとえば、刊行回数は従来のとおり年に一回であっても、投稿の機会が半年に一回あれば、その分だけ、研究者がいつ・どこに投稿するかを選択肢が増えることになり、研究者にとって益すること大であると思われる。

4.2 査読制度の差異

哲学に限らず、国際的な学術論文の査読制度は、いわゆる〈ピア・レビュー [Peer-Review]〉である。すなわち、同業者による同業者のための査読である。国際誌では査読の公平性を担保するために、ダブル・ブラインド（査読者投稿者双方匿名）制査読はもとより、さらに担当編集者にも投稿者情報が知らされないトリプル・ブラインド（編集者査読者投稿者三者匿名）制査読を採用するものもある。このように各国際誌は、投稿者情報が審査に及ぼしうる影響に極めて敏感であり、また学会発表の審査も多くの場合匿名制で行われる。しかし本邦の哲学系学術雑誌は、この点で大きく後れを取っているといわざるをえない。近年、日本

哲学会や日本倫理学会は査読制度をダブル・ブラインド制へと変更したが、日仏哲学会や中世哲学会、美学会といった他の全国区学会の場合、未だシングル・ブラインド制のままである（各大学の名称を冠した哲学系学会についてはいうまでもない）。

上記の問題点は、全国区学会の査読付き機関誌が若手研究者の登竜門として位置づけられる傾向にあり、すでに相当のキャリアを積んできた研究者がそれらに投稿することは多くない、という本邦における研究活動上の慣例に大きく依拠していると考えられる。つまり、匿名制査読が採用されても、少なからず、査読をする側は研究教育機関の常勤教員¹²であり、査読をされる側は非常勤研究者や大学院生である、という非対称性が存在するため、本来の〈ピア・レビュー〉が有する双方向の緊張感が生み出されにくい状況にあると思われる。実際、公表されている直近三か年における日本哲学会編『哲学』、日本倫理学会編『倫理学年報』、日本科学哲学会編『科学哲学』、科学基礎論学会編『科学基礎論研究』、中世哲学会編『中世思想研究』、日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』、応用哲学会編 *Contemporary and Applied Philosophy (CAP)*、美学会編『美学』の公募論文の著者を調査したところ、以下の結果が示しているとおおり、掲載論文の全著者のうち大学常勤教員の割合が小さくなっており¹³、この事態は、一般的に雑誌の規模が大きくなるないし格が上がるにつれて教授職にある研究者の論文掲載の割合が高くなる国際誌¹⁴とは対照的である（ただし、科学基礎論学会『科学基礎論研究』は例外的である。これには、当該雑誌が自然科学に最も隣接する分野であるという点に関係していると考えられる）。

4 哲学系国際ジャーナルと本邦の哲学系ジャーナルとの 差異に関する試論

誌名	出版年	公募論文著者数	大学常勤教員数 (内訳)
『哲学』	2019/2018/2017	29	7 (教 2, 准 1, 講 1, 助 2, 高助 1)
『倫理学年報』	2019/2018/2017	33	12 (准 7, 講 3, 助 2)
『科学哲学』	2018/2017/2016	11	1 (教 1)
『科学基礎論研究』	2019/2018/2017	14	8 (教 4, 准 3, 講 1)
『中世思想研究』	2019/2018/2017	19	3 (教 1, 准 1, 講 1)
『フランス哲学・思想研究』	2019/2018/2017	44	10 (教 2, 准 4, 講 2, 助 2)
CAP	2019/2018/2017	7	2 (准 1, 講 1)
『美学』	2018/2017/2016	51	14 (教 7, 准 4, 助 3)

注記

- ・ 教：教授，准：准教授，講：講師，助：助教，高助：高専助教
※退職者は包含、特任であることが判明しているものは除外。
- ・ 調査にあたり、各大学公式サイト上の教員一覧、科研費公式サイト (KAKEN)、リサーチマップ (researchmap)、各出版社および販売代理店サイト上の著者情報を使用した。現職不明の著者は非大学常勤教員として算定した。
- ・ 公募論文以外は除外。職階や所属は当時のもの (可能なかぎり、刊行年月日ではなく投稿締切年月日を基準とした)。

さらに、個人的経験を述べると、論者は或る全国区学会の機関誌に二度投稿したことがあるが、その審査結果の通知文にはいずれも編集部による〈厳しいコメントもあるかもしれないが、それは教育的配慮によるものであることを理解されたし〉という旨の記載がみられた。本来ならば同業者から同業者に対しては使用されることがないはずの「教育的配慮」という表現からは、当該学会において査読というものが、学生の論文を指導教員が添削することに類するものとみなされていることが推察される。もっとも、論者にはこのような査読の在り方を否定する意図はないが、しかし、それが一般的な国際誌における査読制度とは大きく隔たっているということは否定されえないだろう。

本邦の哲学系学会誌の審査において、誰が誰の論文を審査するかわからないという状況で行われるべき〈ピア・レビュー〉を実践するためには、単なる制度上の変更だけでは不十分であり、全国区学会の機関誌が

若手研究者の登竜門として位置づけられる傾向を修正し、あらゆる年齢・立場の研究者が投稿するという習慣を定着させること、また、投稿者の層の変革と同様に、査読者の層を変革することが必要であると考えられる（国際誌では、常勤の大学教員でなくとも、当該雑誌に掲載経験を有する、あるいは相応の研究業績を有する研究者が査読者に選定されることは珍しくない）。

しかしこれは、紙幅の制限という極めて現実的な問題と表裏一体であり、改善は容易ではない（学会費の多くは機関誌の刊行費用に充てられる）。この点については、以下で述べたい。

4.3 掲載物の差異

すでに言及したが、国際誌の多くは複数回刊行であり、しかも掲載にあたって投稿者が負担すべき費用はない。それに対して本邦の学会誌は、会費を支払う必要があるのはもちろんだが、最新号に論文が掲載された者は次号に応募できないという規定があるものも多い（日本哲学会、日本倫理学会、関西哲学会、日仏哲学会、中世哲学会、等）。これは限りある紙幅の中でより多くの著者の論文を公開するための策であるが、しかし会費の多くが機関誌刊行費用に充当されているという事情を踏まえれば、会費を納入しているにもかかわらずに投稿が許されない年度が存在することは会員にとって不合理であり、とくに査読論文の業績を多く求められる若手研究者にとっては死活問題であるとさえいえるだろう。

もちろん、これは財政的問題と表裏一体であって、刊行回数や紙幅を増やすために会費を増額したり外部資金を獲得したりすることは、経済的な新たな課題を引き起こすことになり、抜本的な解決にはならないと思われる。そこで論者は、雑誌に掲載されるコンテンツの種別の再検討を提案したい。

本来、学術雑誌の第一の目的は、学術的な新規性を有する査読を経た

4 哲学系国際ジャーナルと本邦の哲学系ジャーナルとの 差異に関する試論

原著論文の公表であって、国際誌のコンテンツのほとんどは公募による原著論文ないし書評（場合によっては依頼書評）である。それに対して本邦の全国区学会誌の場合、シンポジウム資料といった査読を経ていない原稿がときにそのコンテンツの半数近くを占める¹⁵。大半のシンポジウム資料は「招待論文」として掲載されるが、これを掲載するために紙面を割き、予算を費やした結果、原著論文の公表に支障をきたすということは、学術雑誌がもつ本来の目的に反するのではないか。一般的にシンポジウムとは、特定の主題について複数人が様々な側面から討論するための場であって、それにあたり新規性のある成果を提示することは必ずしも必要ではなく、むしろ既存の研究成果を用いて分野間の新たな議論を惹起するものである。たしかに、シンポジウムでの発表内容のうちに新規性が含まれていることはもちろんあるし、またそれは望ましいことではあるが、この場合、それは原著論文として査読を受けた後に掲載されるべきであると思われる。しかしそうではなく、あくまでシンポジウム資料として記録するのであれば、ホームページ上で公表するなどして、機関誌に公募論文を掲載するための紙幅を用意する努力が求められるのではないだろうか¹⁶。

もっとも、学会機関誌は、会員による様々な研究成果を〔論文に限らずシンポジウムや学会発表に至るまで〕活動記録として公表する役割を有するという点で単なる論文誌（ジャーナル）とは異なるため、掲載物の種別を限定することには問題があるという反論がなされるかもしれない。しかし、いずれにしても、本邦における今後の哲学研究の促進〔あるいは少なくともその維持〕に直結する事がらとして、紙幅の確保について、投稿資格の制限について、そして掲載物の種別についての検討は必要不可欠なものと思われる。

4.4 インデックス登録状況の差異

ほぼすべてといってもよい国際誌は、掲載物が登録されるインデックスを明記している。基本的に、雑誌や刊行元の学会の格が高いほど多くのインデックスに登録されている。また小規模ないし新興のジャーナルの場合、著名なインデックスに登録されているという事実が、ハゲタカジャーナルから区別されうる指標となるのだ。

しかしながら、本邦の哲学系学術雑誌の大半はインデックス登録に注意を払っていない¹⁷。多くの全国区学会は欧語での論文も公募しており、たとえば日本哲学会は2017年度より欧文論文誌 (*Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan*) を刊行しているが、当誌は2019年12月現在、いかなるインデックスにも登録されていないため、海外の研究者の目に留まる機会は僅少である（非会員が当該コンテンツに辿りつくには、何らかの仕方でタイトルを知り、それを検索エンジンに掛けなければならない）。本邦の学会機関誌に掲載された応募論文が海外の研究界のネットワークに接続されるためには、主要な国際インデックス（たとえば Arts and Humanities Citation Index 等）への登録が喫緊の要事である。

5 おわりに

最後に、本稿の締め括りとして、そもそも論者がなぜ本邦の哲学系学会誌は改革を進めていくべきであると考えたのかについて言及しておきたい。なぜなら、外国語で執筆した論文は国際誌へ投稿するという風潮を作り出せば、本邦の学会誌の改革など不要となるという見解も想定されるからである。

たしかに、和文論文は国内学会へ、外国語論文は国際誌へ、という棲み分けも可能ではある。しかし、今後さらに外国語論文の研究業績とし

ての価値——つまり、研究者人事において重要視される価値——が上がっていくとすれば、日本人研究者はますます外国語で論文を執筆するようになるだろう。しかも、優れた研究成果であればあるほどに、である。そうすると、国内学会誌に投稿される論文の質の低下は不可避であると思われる。これはつまり、本邦における哲学研究の発信の場が世界から取り残されうるということを、ひいてはその存在意義さえもが疑問視されるような状況が生じうるということを意味する。この点に鑑みれば、本邦哲学系学会誌の抜本的な改革は、遅かれ早かれ、着手されるべき重要課題となるだろう¹⁸。

注

¹ 現在、学術雑誌に係るビジネスモデルは、読者が購読料を支払うという従来の購読型、および、論文著者が掲載費 (APC: Article Processing Charge) を負担するかわりに無償で論文が読者に公開されるオープンアクセス型に大別される。オープンアクセスジャーナルには数千ドルの掲載費を要求するものもあるが、オープンアクセスのモデルが広まるにつれて、投稿された論文を適切に査読せず掲載することでより多くの掲載費を獲得しようとする悪徳出版社 (通称「ハゲタカ出版社」) が登場することとなった。学界におけるオープンアクセス制度の歴史、現状、および展望について詳細に論じたものとしては、cf. 横井慶子、「学術雑誌出版状況から見るオープンアクセスジャーナルの進展」、*Library and Information Science* 70 巻 2 号 (2013 年) : 143-175 頁。また、オープンアクセスジャーナルとハゲタカジャーナルとに関する詳しい説明については、cf. 栗山正光、「ハゲタカオープンアクセス出版社への警戒」、『情報管理』58 巻 2 号 (2015 年) : 92-99 頁；北海道大学北キャンパス図書室 (編)、「午後の講座：オープンアクセスとハゲタカジャーナル」、北海道大学北キャンパス図書室「国際オープンアクセスウィーク 2018」企画資料 (2018 年) : 1-22 頁；千葉浩之、「ハゲタカジャーナル問題：大学図書館員の視点から」、『カレントアウェアネス』341 号 (2019 年) : 12-14 頁。

² 哲学系ハゲタカジャーナルを探す際、スウェーデン・ウプサラ大学が刊行する *The Ethics Blog* にて掲載の “Where to Publish and not to Publish in Bioethics — the 2019 List” を参照した。当記事はとりわけ生命倫理学分野におけるハゲタカ懸念ジャーナルを多数列挙している。URL は以下のとおり。

<https://ethicsblog.crb.uu.se/2018/05/02/where-to-publish-and-not-to-publish-in-bioethics-the-2018-list/>

³ *International Journal of African Religions; International Journal of American Religions; International Journal of Astrology; International Journal of Christianity; International Journal of Comparative Religion; International Journal of Neopaganism; International Journal of Atheism; International Journal of Epistemology; International Journal of Buddhism; International Journal of*

哲学系国際誌への論文投稿に係る投稿先選定のための手引き

Ethics & Moral Philosophy; International Journal of European Religions; International Journal of Islam; International Journal of Judaism; International Journal of Pacific Island Religions; International Journal of Philosophical History; International Journal of Religious Mysteries; International Journal of the Shintō Religion; International Journal of Mythology; International Journal of Religion; International Journal of Sikhism; International Journal of Logic; International Journal of Jainism & Jaina; International Journal of Latin American Religions; International Journal of Asian Religions; International Journal of Middle Eastern Religions; International Journal of New Age Beliefs; International Journal of Metaphysics; International Journal of Bahá'í Faith; International Journal of Hinduism; International Journal of Agnosticism; International Journal of Philosophy. これらの雑誌はすべて同社が刊行するハゲタカ懸念ジャーナルである。

⁴ 雑誌ごとに独立したホームページがあり、雑誌表紙の画像が添付されているが、いずれの雑誌のものにも「Volume 1, Issue 1, 2014」と記載されている。

⁵ あくまで目安であり、それに該当するすべての雑誌がハゲタカジャーナルであること、また、該当しないすべての雑誌がハゲタカジャーナルではないことを保証するものではない。本稿が提示するのは、該当する場合にはその雑誌への投稿に慎重を期すべきと思われる目安となる特徴である。

⁶ Heyward は、投稿先の選定の際には「連絡先／対象領域／編集委員会／論文掲載料の方針／掲載論文の質／査読プロセス／インデックス情報／論文の撤回方針／著者へのアピール／Eメールによる招待」の十点を確認するよう勧めている。Cf. Andrea Hayward、「ハゲタカ出版社を見抜くためのチェックリスト」、Editage Insights における記事（2018年）、URL：<https://www.editage.jp/insights/how-to-identify-predatory-publishers-a-checklist>

他に、cf. Chad Musick、「ハゲタカ出版 (Predatory Journals) に関する 8 つの質問：名声を汚すことなく研究を守り、研究資金の不正な搾取や詐欺に遭わないために」、Think Science における記事（2015年）、URL：<https://thinkscience.co.jp/ja/articles/Predatory-Journals.html>

⁷ Journal Network 社刊行の *International Journal of Philosophy* 誌では「Articles concerned with idealism, pragmatism, phenomenology, existentialism, structural and post-structural, as analytic philosophy are considered.」と記載されているが、このハゲタカ懸念ジャーナルの出版元である Journal Network 社は、註 3 で紹介したように、「Philosophy & Religion」の分野だけで計 31 もの数の細分化された雑誌を刊行しており、出版社自体がこの特徴を備えているといえるだろう。

⁸ このような特徴は今後消去されていく可能性があるため、注意が必要である。

⁹ *Journal of the American Philosophical Association* 誌では「12 週間以内」となっている。なお、「The journal initially set a goal of responses within 12 weeks; its current average response time is 29 days.」（イタリックは引用者による）と記載されているが、この「29 日」というのは、外部査読に回されずに編集者判断で比較的迅速になされる不採択判定（＝デスクリジェクト）を受けた原稿が大きく平均値を下げているという可能性を考慮する必要があるだろう（査読に関する詳細な統計を明記している *Ergo: An Open Access Journal of Philosophy* 誌では、直近 12 か月になされた全投稿のうち、デスクリジェクトの割合は 70% を超えている）。当該雑誌が目標として設定している査読期間はあくまで「12 週間以内」である。

¹⁰ *The Journal of Philosophy* 誌では「6 か月以内」となっている。

¹¹ 例外的に、科学基礎論学会、日本科学哲学学会、および応用哲学学会の各機関誌は随時原稿を募集している。

¹² 著者がいくつかの著名な哲学系学会に問い合わせをした結果、次のような回答を得た。

①日本哲学学会：〈現在査読体制や評価基準の詳細を公開することについて検討中のため、現時点では回答することが難しい〉。ただし、機関誌『哲学』の67号（2016年）までは外部査読者の氏名が公開されており、67号および66号（2015年）に公開されている外部査読者氏名（前者27名、後者30名）を調査した結果、その全員が当時に専任の大学教員（名誉教授を含む）であった。なおこの調査では、各大学公式サイト上の教員一覧、科研費公式サイト（KAKEN）、リサーチマップ（researchmap）、各出版社および販売代理店サイト上の著者情報を使用した。

②日本倫理学会：〈基本的に内部査読者により査読が行われており、外部査読者に関する選定基準は現在のところ存在しない〉。当該学会では編集委員会による内部査読によって公募論文採択の合否が決定されるが、少なくとも直近二か年では、10名の編集委員のうち、常勤職にあることが確認されなかった委員は1名のみである（調査方法は①と同じ）。

③中世哲学学会：〈投稿規定では「投稿論文の査読は、各論文につき主査1名と副査2名で行うものとする」、「投稿論文の主査は、編集委員の中から編集委員会が決定する」、「副査の内少なくとも1名は評議員から選定されるものとする」となっているが、「編集委員」や「評議員」には非常勤の教員も選出可能であり（実際、現在の評議員には非常勤の教員もいる）、非常勤の教員が主査や副査になることは可能である〉。ただし、少なくとも現在では、24名の評議員のうち常勤職にない評議員は1名のみであり、また常勤職にない編集委員は0名である（大学常勤教員退職者は除く。調査方法は①と同じ）。なお外部査読者として大学常勤教員以外の研究者が選定されるか否かについては明確な回答が得られなかった。

④日仏哲学学会：回答なし（問い合わせメールへの返信なし）

⑤日本科学哲学学会：回答なし（問い合わせメールへの返信なし）

⑥科学基礎論学会：回答なし（問い合わせメールへの返信なし）

⑦応用哲学学会：回答なし（問い合わせメールへの返信なし）

⑧日本カント協会：回答なし（問い合わせメールへの返信なし）

※上記の結果から明らかなように、当該問い合わせへの返答が一切なかった全国区学会はおよそ三分の二に上る。〔別件ではあるが〕複数の国際誌に問い合わせをした際にはいずれも数日ないし数週間以内で何らかの返答をもらえたという個人的な経験を踏まえることが許されるならば、問い合わせへの対応という点も国際誌と本邦哲学系学会誌との相違として挙げることができるだろう。

¹³ もっともこの事実からは、大学常勤教員が当該雑誌に投稿する機会が少ないという可能性だけでなく、彼らの論文が査読によって悉く不採用となっているという可能性をも引き出すことができるが、しかしもしこの可能性を考慮するとなれば、本稿の目的をはるかに超える問題——すなわち、本邦の大学の研究能力それ自体に関する問題——が生じるため、ここでは検討しない。

¹⁴ たとえば、著名な哲学系オープンアクセスジャーナルである *Philosophers' Imprint* 誌

哲学系国際誌への論文投稿に係る投稿先選定のための手引き

の最新巻（2019年）では、著者のほとんどが教授ないし准教授である。

¹⁵ たとえば、日本哲学会機関誌『哲學』（2019年）においては、目次や会則・規定を除いた全273頁のうち122頁（7-128頁）がシンポジウム原稿およびワークショップ原稿となっている。

¹⁶ 日仏哲学会機関誌『フランス哲学・思想研究』では、発表要旨および書評も掲載されることが規約で定められているが、紙冊子上では省略されており、ホームページ上で公開されている。この方法をシンポジウム資料などにも適用すれば、その分の紙幅を担保できるため、公募論文の掲載数も確保できるだろう（なお当該機関誌は、論文が掲載された会員の次号への投稿を禁じている）。

¹⁷ 日本科学哲学会機関誌『科学哲学』および科学基礎論学会欧文機関誌 *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science* 誌は〈PhilPapers〉に登録されている。ただし、〈PhilPapers〉は個人でも著書や論文を登録でき、また、本稿がハゲタカ懸念ジャーナルとして紹介した *Open Journal of Philosophy* 誌も登録されている。

¹⁸ 本稿が言及した本邦の哲学系学会誌の諸特徴を総括すると、科学基礎論・分析哲学・応用哲学といった自然科学との関連が密である分野を専門とする学会誌は、他の分野のそれと比較すれば、より国際誌の水準に近い運営状況にある——あくまで比較的にはあるが——といえるだろう。

This work is licensed under a Creative Commons
“Attribution 4.0 International” license.



© 2020 Journal of Science and Philosophy 編集委員会